

令和2年度第1回レインボープラン評価検討委員会

会 議 録

日時：令和3年1月20日15時～17時10分

会場：長井市役所3階第1委員会室

1. 開 会

2. 委嘱状交付

新型コロナウイルス感染防止の観点から、机上に配布

3. あいさつ

(内谷長井市長)

1988年(昭和63年)の市民会議が運動の発端。平成8年にコンポストセンター(以下、「センター」)が完成し、翌9年から事業開始となり今日に至る。この間、レインボープラン推進協議会(以下、「協議会」)が中心となって「地域資源の循環」を主な理念とし市民とともに様々な活動を展開してきたが、センターの老朽化など様々な問題が出ている。広く知られているレインボープラン(以下、「プラン」)のブランド力を活かしながら、今後はSDGs(持続可能な開発目標)につながる施策をご提言いただきたい。

※はじめての顔合わせとなるため、委員の自己紹介を行った。

—— 市長退席 ——

4. 協議(要旨)

※協議の前に委員長を選出を行い、規定第5条により、委員の互選によって下平裕之教授に決定。引き続き会議の座長に選出。

① 会議の趣旨説明 【地域づくり推進課長 新野弘明】

資料「長井市レインボープラン評価検討委員会設置規定」をもとに委員会の役割を説明

② 事業推進体制について 【地域づくり推進課長 新野弘明】

資料「レインボープラン推進事業体制」をもとに各担当者の紹介

③ 「レインボープラン評価調査事業報告書」について【協議会職員 小林美和子】

資料「レインボープラン評価調査事業報告書」の詳細な解説

④ レインボープランの現状と課題 【地域づくり推進課 補佐 佐藤裕子】

プランの現状を明らかに、事業が抱える課題を行政サイドから説明

○質疑

委員 A: このような活動は 10 年が一つの区切りとなる場合が多い中で 20 年継続しているのは素晴らしいと思う一方で、やはり当時の勢いがなくなってくるのはやむを得ない。いちばんの驚きは、プランの事業計画がなかったために、目標（指標）が明確ではなかったこと。

生ごみが減っていることがプランにとっては問題だが、今や学校教育の現場などではフードロス※の取り組みが主流になっている中で、今後それをどう受け止めていくか。もう一つは、有機農産物のニーズがそれほど高くないということもあり、プランの理念である“安全で安心な土づくり”、そこからレインボー農産物の必要性を再考する必要があるのではないかと。「土づくり」の面ではプランだけが土づくりの主体ではないはず。「生ごみ」と「土づくり」について長井市としてどうあるべきか。その中でプランがどう位置付けられるのか。その上で現代的な目標設定が必要だろう。

※フードロス（食品ロス）とは、まだ食べられるのに廃棄される食品のこと。日本では年間 2550 万トンの食品廃棄物が出され、そのうち、まだ食べられるのに廃棄される食品が 612 万トン。これを減らそうとする取り組み。SDGs を踏まえ、国の「第四次循環型社会形成推進基本計画」では 2030 年度までに家庭からの食品ロスを半減するとの目標が定められた。

農林課長: 国でも SDGs の観点から環境型の農業を推奨しており、政策の目標のひとつで、県や長井市においても重要。畜産たい肥が中心だが、環境型農業に取り組む農家への支援制度も出てきている。プランで生産されるたい肥が減少し、取り組む農家も伸び悩んでいる点は課題として認識している。

委員 A: 畜産たい肥の利用状況はどうなっているか。

農林課長: 畜産を含めた複合経営されている方は自家消費。地域内では畜産農家からもらって使用しているところもある。今後も、環境型農業という観点から伸びて欲しい。

委員 B: 畜産たい肥の現状について。酪農をしている知人から 250t のたい肥を譲ってもらい田んぼに撒いている。この量は、1 年間で生産されるコンポスト量に近い。畜産たい肥は膨大な量が生産されるため、以前は問題になっていたが、現在は「環境保全型農業直接支払制度」のおかげで全量消費できる上、農地に返す、地域資源の循環システムとして成り立っていると思う。

もちろん、プランの理念と事業内容は評価できると思うが、使う立場からするとコンポストは使いにくい。プランが進めてきた特別栽培米は今や当たり前で、高く売ることでもできず差別化は図れない。

農林課長: 畜産をしている現場の委員 B のご意見のように、現状は農林課としても認識

している。

委員 C: 人口が減っていけば生ごみが減るのは当たり前。少なくなるコンポストの利用先を、循環というシステムを維持するために学校給食米の栽培にのみ使用するなどして、プランをもっとアピールする。また、移住する前から知っている、非常に有名な取り組みだが、市民へ浸透していないと感じているため、循環への関わり方のシステムを変えてみてはどうか。生ごみを出す若年層が少ないと出ていたようだが、むしろ若い世代に真剣に考えさせる時期でないか。いいところを残して、段階的に移行していく。

委員 D: アンケート調査を実施した内容から、市民参加について。アンケートの自由記述では、循環のしくみへの認識が低いようだった。循環への参画を身近なものにしてもらうための PR は必要と思われる。

委員 C: 自家消費のためにコンポストを使っているが、あまり袋を買っている人を知らないし、塩分が多いなどの悪いイメージも一部にあって、なかなか払しょくできず、そういった誤解のままなのは残念。

事務局: 事務局で示した「現状と課題」について補足。協議会が今の体制になる 2010 年以前は、市直営の時代（企画調整課レインボープラン推進室）があり 3 人体制だったが、行財政改革の見直しの中、市民による運動は市民（民間）へ移管するという方針のもと現体制になった。多額のコストが悪という単純な判断は避けていただきたい。

個人的に、循環は安心をもたらすものでなければならないと思う。市民にとっての循環とは、資源のリサイクルを目の当たりにすること。従来のプランのシステムとは別の、新しい何かが必要。人は「共感と納得」がないと動かない。現在のプランは、共感性が徐々に低下して、事業そのものも減退し厳しい状況であるため、このままで納得（＝行動）は望めない。

市長や委員 A からだされた SDGs の観点から、これから長井市が取り組む SDGs の施策にプランをどのように組み込むか、是非ご提言いただけるよう事務局としてお願いしたい。

5. その他

次回会議以降について

- ・ 次回会議は約 1 か月後に開催
- ・ 第 1 回目会議内容を持ち帰り、次回会議で各委員の考えを集約